
墜天使の歌

夢咲望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墜天使の歌

【Nコード】

N0621B

【作者名】

夢咲望

【あらすじ】

その昔、天上界は神を支持する派、否定する派と、勢力が二分化していた。この戦いに意味はあるのか？神聖なる物語の幕が切って開かれる。

第一章「幕開け」

鋭く白い閃光が、雲の間を横切った。

金に輝く長髪を風になびかせながら、彼女は天を駆けるように翼を羽ばたかせ、飛び続けた。

やがてグレーの城壁を彼女の瞳が捕えた時、白い翼は緩やかに折り畳まれた。

「セルーセ様！敵に追われていたようですが、お体はご無事で？」

地面へとゆっくり着地する彼女を、心配そうに若い兵士が駆け寄ってくる。彼もまた、白い翼を背に纏っていた。

「心配ありません。敵は私を見失ったようです」

「しかし……」

兵士は、彼女がかばうようにして手で押さえている肩を見た。傷が相当深いのか、止まらない血はドクドクと溢れ出ている。

「それよりも、父上と母上は何と仰っていましたか？」

「黒天使たちが新たな動きを見せ始めているらしいです。また戦いが起こるかもしれないと」

「そうですね……また、戦うことになるのですね」

セルーセは視線を地面に落とした。そして、仰ぐように空を見上げた。

第二章「神という者」

セルーセは治療室で包帯を巻いてもらい、外へ出た。肩部分の純白の羽が血で赤く染っていて、とても痛々しい。

たくさんの花が咲きほこる緑が豊かな中庭に着くと、彼女は噴水の淵に座り、透き通った水をそつと手ですくった。

そのままそれを肩に掛け一瞬顔を歪めるが、傷口は少しだけ治り始めていた。

遠くを走り回っていた子供達は、セルーセの姿を見つけると嬉しそうに駆け寄って来た。

癖っ毛の男の子と、三つ編みの女の子の髪は、彼女と全く同じ輝く金色をしていた。

「あれ……？」

男の子が目丸くする。

「セルーセさま、ケガしてるの？」

「大丈夫？セルーセさま」

女の子はそう言うと、手で彼女の肩にそつと触れた。二人はしゃがみ込んで、心配そうに青い目をセルーセに向ける。

「大丈夫よ。これくらいの事でへこ垂れてたらお城が守れないでしょうっ？」

二人を安心させる為に、セルーセはにこやかに微笑んでみせた。

そして、胸に光る銀の十字架を握り締めた。

「それに、神はいつも私を見守って下さっているから」

「神様って本当にいるのかなあ？」

男の子も、セルーセと同じ胸の十字架と睨めっこしている。

「ええ、きつというはずよ」

「リユート！ノア！」

中年だが、どこか気品のある女性が二人の子供を見るなり一目散に駆けてきた。

「姫様、またうちの子が何かやらかしたんでしょうか？」

「いえ、とんでもない」

セルーセはいつもの彼女の気迫に圧倒され、目を丸くしたまま首を振った。

「それならいいんですけど……。さあ、姫様はお忙しいのだから

二人共こちらへ来なさい」

「はあい……」

「またね、セルーセ様」

子供達は名残惜しそうに振り返りながら手を振り、セルーセもそれに応えた。

彼女は二人を見送ると、城内へと歩を進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0621b/>

墜天使の歌

2010年12月30日01時18分発行